

明治美術学会刊

『近代画説』

十二号

平成十五年（二〇〇三）年十二月十三日発行

抜刷り

特集「近代」と「美術」の外側

矢代幸雄と

アメリカ巡回日本古美術展覧会（一九五三年）

久保いくこ

矢代幸雄とアメリカ巡回

日本古美術展覧会（一九五三年）

久保 いくこ

KUBO Itoko

はじめに

アメリカ巡回日本古美術展覧会（以下、アメリカ巡回展）は、日本が占領を解かれて間もない一九五三年に、国宝及び重要文化財六十九件を含む九十一件百十八点の日本の古美術を、アメリカ主要五都市に巡回した海外展である。日本美術史上の代表的作品を一堂に集める充実した出品内容と、一年をかけてアメリカを回るといふ規模の大きさは、前例を見ないものであった。

矢代幸雄は、主催者である文化財保護委員会の一員としてこの展覧会に携わった。矢代の自伝的著作『私の美術遍歴』（以下『遍歴』）は出版から三十年を経た今日においてもなお矢代の経歴を伝える最も詳しい資料であるが、その第二十三章「戦後海外における日本古美術大展覧会の開催」はこの展覧会についての回想に充てられている。これによると「この国策的展覧会は、ほとんどすべて私の企画

でやった」というから〔註1〕、矢代が実質的に展覧会の采配を振ったものらしい。矢代の経歴は、加藤哲弘氏によって示されたように、大きく三期に分けることができる〔註2〕。第一の西洋美術史研究の時代、第二の日本・東洋美術史研究の時代に次いで、戦後に相当する第三期には、文化財保護委員会の活動や大和文華館の設立があるが、そのなかでもアメリカ巡回展は大きなプロジェクトであった。

本稿は、まず展覧会の概要を示し、次に展覧会が実現に至る経緯と、出品物の選定を巡る事情を明らかにする。同時に、矢代の視点から著述された『遍歴』に客観的な検証を加える試みとしたい。

一、展覧会の概要

アメリカ巡回展の経過や派遣係官からの報告、現地での報道記事

などは、文化財保護委員会によって『アメリカ巡回日本古美術展覧会報告書』(以下『報告書』〔註3〕)にまとめられている。また、全出品物の図版を五点のカラーを交えて収録し、それぞれに解説文を付したカタログ *Exhibition of Japanese Painting and Sculpture* (以下『カタログ』)〔註4〕が会場で販売された。

展覧会は「米国における日本古美術展覧会」と呼ばれることが多かった。一九五二年八月の文部省の文書には「米国内における日本古典美術展覧会」とあり〔註5〕、同年十月の閣議決定では「アメリカ合衆国における日本古美術品展覧会」と称された〔註6〕。「アメリカ巡回」の語は『報告書』が初出である。ポスターは会場ごとに *Pageant of Priceless Treasures* 或は *Masterpieces of Japanese Art* のような展覧会名を入れて作られた〔註7〕。『カタログ』の書名と同様に、いずれの英語名も日本語の古美術に相当する語を用いてはいない。

展覧会の主催者は、文化財保護委員会と、会場となった五つの美術館の館長であった。当時の文化財保護委員会は、委員長に経済の専門家で浮世絵蒐集でも知られる高橋誠一郎、委員として唯一の美術史家である矢代、国宝保存会会長や国立博物館評議員会長などを歴任する細川護立、日本銀行総裁の一万田尚登、建築家の内田祥三の五名から成る。アメリカ側は、ワシントンのナショナル・ギャラリーのデーヴィッド・E・フィンレー David E. Finley、メトロポリタン美術館のフランシス・ヘンリー・テラー Francis Henry Taylor、シアトル美術館のリチャード・E・フルー Richard E. Fuller、シカ

ゴ美術館のダニエル・カットン・リッチ Daniel Catton Rich、ボストン美術館のジョージ・H・エッジエル George H. Edgell の各館長が名を連ねた。米国側顧問にはジョン・D・ロックフェラー三世 John D. Rockefeller III の名前がある〔註8〕。

文化財保護委員会は、一九五〇年八月二十九日に施行された文化財保護法に基づいて文部省の外局として設置された、文化財の保存と活用を担う機関である〔註9〕。海外における日本古美術展覧会は、文化財の普及活用事業の一環に位置づけられている。委員会の付属機関には、文化財専門審議会と事務局、東京・京都・奈良の国立博物館、そして東京・奈良の国立文化財研究所があった〔註10〕。そのうちの事務局には記念物課、美術工芸課、建造物課、無形文化課などがあり、日本古美術展覧会のような展覧会に際して出品目録の作成などの実務を手掛けたのは美術工芸課である。アメリカ巡回展には、古美術品の取り扱いのために日本から六名の係官が派遣されたが、交替を含め延べ九名のうちの三名はこの美術工芸課の職員であった〔註11〕。

展覧会の実施に先立ち、日米の間で展示期間や出品物の管理責任などを取り決める協定が結ばれた。ここで注目されるのは、各参加美術館の代表者五名と共にこれに署名した高橋誠一郎の肩書きが、日本国政府の代表者となっていることである。それゆえに「展覧会は、日本国政府と参加美術館の共催とする」と協定の第一条に定められた。しかし『カタログ』では *Sponsored by the Government of Japan* つまり日本政府後援となっている。予算の面では、日本側は

桃山障屏画 8件

49	日月山水図／大阪、金剛寺	重文	●
50	調馬図／京都、醍醐寺	重文	
51	南蛮屏風〔宮内庁〕	御物	
52	花卉図 海北友松筆／京都、妙心寺	重文	
53	猿猴竹林図 長谷川等伯筆／京都、相国寺	重文	
54	松に草花図／京都、智積院	国宝	
55	牡丹図（宸殿牡丹之間）／京都、大覚寺	重文	●
56	名古屋城本丸御殿障壁画／愛知、名古屋市	重文	●

江戸派 21件

57	名古屋城本丸御殿障壁画 狩野探幽筆／愛知、名古屋市	重文	
58	枯木鳴鶴図 宮本武蔵筆／神奈川、長尾美術館〔大阪、和泉市久保惣記念美術館〕	重文	● ● ●
59	風神雷神図 俵屋宗達筆／京都、建仁寺	国宝	
60	草花下絵和歌巻 光悦筆 宗達下絵／東京、畠山一清〔東京、畠山美術館〕	→重文	● ●
61	山帰来図 宗達筆／東京、川合玉堂〔東京国立博物館〕		
62	躑躅図 尾形光琳筆／東京、団伊能〔東京、畠山美術館〕	重文	●
63	尾形光琳関係資料 小西家伝来／東京、渡辺善十郎〔文化庁〕	重美→重文	
64	四季花鳥図巻 抱一筆／東京国立博物館		●
65	煙霞帖 浦上玉堂筆／神奈川、梅沢彦太郎〔東京、梅沢美術館〕	重美→重文	●
66	楼閣山水図 池大雅筆／東京国立博物館	重文→国宝	● ●
67	兎道朝暾図 青木木米筆／岡山、大原総一郎〔京都、大原謙一郎〕	重文	● ●
68	市河米庵像 渡辺華山筆／東京、片倉五郎〔京都国立博物館〕	重文	
69	雪松図 円山応挙筆／東京、三井高公〔東京、三井文庫〕	国宝	● ●
70	花鳥写生図 円山応挙筆／京都、西村総左衛門	重文	
71	舞踊図／京都、京都市	重美→重文	
72	縄暖簾図／京都、原邦造〔東京、アルカンシェール美術財団〕	重美→重文	
73	湯女図／静岡、岡田茂吉〔静岡、世界救世教〕	重美→重文	●
74	見返り美人図 菱川師宣筆／東京国立博物館		
75	美人図 懷月堂筆／東京国立博物館		
76	風俗図巻 宮川長春筆／東京国立博物館		
77	美人図 宮川長春／奈良、大和文華館	重美	

彫刻 14件

78	銅造菩薩半跏像（法隆寺献納） 台座框に丙寅年の刻銘がある／東京国立博物館	→重文	●
79	銅造阿弥陀三尊像（法隆寺献納） 台座刻銘「山田殿像」／東京国立博物館	→重文	
80	銅造菩薩半跏像（法隆寺献納）／東京国立博物館	→重文	
81	銅造菩薩立像（法隆寺献納）／東京国立博物館	→重文	
82	銅造菩薩半跏像（法隆寺献納）／東京国立博物館	→重文	
83	銅造観音菩薩立像（法隆寺献納）／東京国立博物館	→重文	
84	木造普賢菩薩立像／奈良、法隆寺	重文	
85	銅造聖観音立像／兵庫、鶴林寺	重文	● ●
86	木造衆宝王菩薩立像／奈良、唐招提寺	重文	●
87	乾漆薬師如来坐像／京都、神護寺	重文	●
88	木造天燈鬼龍燈鬼立像 康弁作／奈良、興福寺	重文→国宝	●
89	木造伎楽面／奈良、東大寺	重文	●
90	木造伎楽面／東京国立博物館	→重文	
91	阿弥陀三尊及僧形像 銅板押出仏像（法隆寺献納）のうち／東京国立博物館	→重文	

- ・出品目録は『カタログ』の分類に従い『報告書』を参照して作成した。名称の表記は通例に倣い適宜改めた。
- ・「指定」欄は1952年10月当時。「現所有者」欄と「現状」欄は、1997年12月現在。「現状」は変更があったもののみ示した。
- ・「米」欄の●印は、アメリカ側が作成したドリームリストに含まれる出品物、同じく「日」欄の●印は日本側の出品目録案に含まれる出品物を示す。それぞれ神奈川近代文学館所蔵矢代幸雄関係資料 No.36193.の小冊子「B 日本古美術展アメリカ側希望案」と「A 日本古美術展出品目録案」を参照した。
- ・「特」欄の●印は、矢代幸雄『日本美術の特質』（初版、1943年）の図版64点に含まれる作品を示す。

番号	名称／府県名、所有者〔現所有者〕	指定→現状	米	日	特
1	帝釈天 十二天像のうち／奈良、西大寺	重文→国宝			
2	無畏十力吼菩薩 五大力菩薩像のうち／和歌山、有志八幡講十八箇院	重文→国宝	●	●	
3	不動明王像／京都、曼殊院	重文→国宝			
4	円仁（慈覚大師） 聖徳太子・天台高僧像のうち／兵庫、一乗寺	重文→国宝			
5	勤操僧正像／和歌山、普門院	重文→国宝			
6	釈迦如来像／京都、神護寺	国宝		●	
7	降三世明王 五大尊像のうち／京都、教王護国寺	国宝	●		
8	千手観音像／東京国立博物館	重文→国宝		●	
9	阿弥陀浄土曼荼羅図／文化財保護委員会〔奈良国立博物館〕	重文			
10	大威徳明王像／東京、根津美術館	重文		●	
11	阿弥陀二十五菩薩来迎図／奈良、興福院	重文			
12	山越阿弥陀図・地獄極楽図／京都、金戒光明寺	重文			
13	二河白道図／兵庫、村山長拳〔兵庫、香雪美術館〕	重文		●	
14	稚児大師像／兵庫、村山長拳〔兵庫、香雪美術館〕	重文			
15	玄奘三蔵像／東京国立博物館	重文		●	
16	不動明王像 信海筆／京都、醍醐寺	重文	●		
17	五百羅漢像 伝僧明兆筆／京都、東福寺	重文			
やまと絵 15件					
18	絵因果経 伝弘法大師筆／京都、上品蓮台寺	重文→国宝	●		●
19	鳥獣人物戯画／京都、高山寺	国宝	●	●	●
20	伴大納言絵巻／東京、酒井忠博〔東京、出光美術館〕	国宝	●		●
21	地獄草紙／文化財保護委員会〔奈良国立博物館〕	重文→国宝	●		
22	北野天神縁起／京都、北野天満宮	重文→国宝	●		
23	平治物語絵巻（六波羅行幸巻）／東京国立博物館	重文→国宝	●		
24	天狗草紙／東京、中村庸一郎〔中村雄太郎他二名〕	重文			
25	一遍聖絵 法眼円伊筆／東京国立博物館	国宝	●	●	●
26	西行物語絵巻／岡山、大原総一郎〔大阪、萬野美術館〕	重文			
27	扇面法華経冊子／大阪、四天王寺	国宝			●
28	観音賢経冊子／神奈川、高梨仁三郎〔東京、五島美術館〕	重文			
29	山水屏風 六曲屏風／京都、神護寺	重文→国宝			
30	源頼朝像 伝藤原隆信筆／京都、神護寺	国宝	●		●
31	小大君像（佐竹本三十六歌仙切）／奈良、大和文華館	重文	●	●	
32	明恵上人像／京都、高山寺	重文→国宝	●		
室町水墨画 16件					
33	寒山図 可翁筆／神奈川、長尾美術館〔東京、服部敬他二名〕	重文→国宝	●	●	
34	白鷺図 良全筆／神奈川、浅野長武〔所有者不明〕	重文			
35	布袋図 黙庵筆 月江正印賛／兵庫、住友吉左衛門〔京都、泉屋博古館〕	重文		●	
36	溪陰小築図／京都、金地院	国宝		●	
37	三益斎図 「周文」の印あり／東京、静嘉堂	重文			
38	竹斎読書図 伝周文筆／東京国立博物館	重文→国宝	●		
39	寒山図 霊彩筆／神奈川、原寿枝〔東京、大東急記念文庫〕	重文		●	
40	維摩居士像 文清筆／奈良、大和文華館	重文			
41	秋冬山水図 雪舟筆／東京国立博物館	重文→国宝		●	
42	天橋立図 雪舟筆／東京、山内豊景〔京都国立博物館〕	国宝			
43	花鳥図 伝雪舟筆／東京、小坂順造〔京都国立博物館〕	重文			
44	瀟湘八景図 祥啓筆／兵庫、白鶴美術館	→重文			
45	山水図 狩野元信筆／京都、金地院	重文		●	
46	山水花鳥図 伝狩野元信筆／京都、霊雲院	重文	●		
47	松鷹図 雪村筆／東京国立博物館	重文		●	
48	風濤図 雪村筆／京都、野村文英〔京都、野村文華財団〕	重文	●		



応挙筆《雪松図》を鑑賞するアイゼンハワー大統領夫妻と新木駐米日本大使
(ワシントン会場にて 1953年2月1日)



特別に作られた鳥居（シアトル美術館正面）

日本国内での運搬費を負担するに止まり、往復の海上輸送及びアメリカ国内での運搬費、出品物に掛ける保険料、そして展覧会に付き添う日本側係官の旅費などは、各参加美術館が分担した〔註12〕。

九十一件百十八点の出品物には〔註13〕、《鳥獣人物戯画》《伴大納言絵巻》《源頼朝像》、宗達の《風神雷神図》などの名品が含まれる（表1参照）。内訳は『カタログ』によれば絵画七十七件、彫刻十四

今となつては八十五件が国宝・重文である〔註16〕。内容は六世紀の仏教彫刻から江戸時代の絵画までなので、展覧会名の「古美術」が江戸時代以前の美術を指すことが分かる。

会場と会期は、ワシントンのナショナル・ギャラリーで一九五三年一月二十五日より二月二十五日、ニューヨークのメトロポリタン美術館で三月二十七日より五月十日、シアトル美術館で七月九日よ

件だが、『報告書』では《木造伎楽面》と《阿弥陀三尊及僧形像》を工芸に分類している〔註14〕。このうち国宝は十二件、重要文化財は五十七件なので、九十一件の実に四分の三に相当する六十九件が国宝・重文級の名品であった。これは一九五二年十月当時の指定であるから、一九五二年三月の第二次国宝指定と同年七月の第二次重要文化財指定を反映した数字である〔註15〕。のちに重要美術品が重要文化財へ、重要文化財が国宝へと変更された例があり、

り八月九日、シカゴ美術館で九月十五日より十月十五日、ボストン美術館で十一月十五日より十二月十五日までであった〔註17〕。ニューヨーク会場でやや長めに四十六日間の展示をしたのは、一ヶ月ごとの展示と移動の繰り返しである。順序は「不必要な旅行をさけるように編成しなければならない」と協定に定められたにも拘わらず〔註18〕、出品物は横浜を出港してアメリカ海軍輸送船で西海岸のシアトルに上陸したのち、列車でワシントンに移動し、再び列車でシアトルまで往復してから、東海岸のベイヨン港で船に積まれたから、三回も大陸を横断した〔註19〕。その理由は「各都市の気候條件を考へて、各々の土地でなるべく良い時期を選ぶやうにした」からだと言われている〔註20〕。なお、日本に戻った出品物を展示する記念特別展は、東京国立博物館で一九五四年三月十二日より二十一日まで開催された〔註21〕。

二、海外における 日本古美術展覧会の流れ

日本から海外へ古美術を運ぶ日本古美術展覧会はしばしば開かれてきた。古くは一九一〇年の日英博覧会に、古美術が現代美術などと一緒に出品された〔註22〕。一九三六年にはハーヴァード大学創立三百年記念式典に合わせて、ボストン日本古美術展覧会が開かれた。国際文化振興会(KBS)を中心にして組織されたこの展覧会委員に、矢代は委員及び実行委員として加わった。出品物の運搬や付

添いを担ったのは山中商会である〔註23〕。一九三九年のサンフランシスコ万国博覧会日本古美術展覧会には、国際文化振興会によって出品が行なわれた〔註24〕。同年のベルリン日本古美術展覧会は、戦前に文部省が行なった唯一の展覧会であるが、矢代は委員及び実行委員として参加した〔註25〕。

戦後になって日本の古美術が海外へ貸し出された最初は、一九四九年にシアトル美術館で開かれた日本美術展である。連合国軍総司令部の美術顧問を務めたのち帰米してシアトル美術館副館長となったシャーマン・リー Sherman Lee が、単に中国美術の反映とされている日本美術観を修正したいと思い企画したもので、館所蔵の日本美術コレクションを中心に、日本の博物館や個人から借り出した十三点を加えた合計三百五十点で日本美術史を体系的に示した〔註26〕。国立博物館(一九五二年五月に東京国立博物館と改称)から出品された鳥獣戯画残闕、雪舟筆径山寺真景図などの五点は、シャーマン・リーの選択によるものである〔註27〕。

一九五一年のサンフランシスコ日本古美術展覧会は、同年七月にデ・ヤング記念美術館館長ウォルター・ハイル Walter Heil より国立博物館の原田治郎へ宛てて借用依頼の手紙が届き、文化財保護委員会の下で九月の講和会議に合わせてわずか一ヶ月で準備されたという、サンフランシスコ講和条約締結を記念する展覧会である。ハイルの案はアメリカで所蔵されている日本美術に加えて日本からも借りたいというものであったが、日本側の希望により日本の所蔵品のみの展覧会となった〔註28〕。次いで一九五三年のアメリカ巡回展

は、日本から運んだ展覧会として戦後二回目となる。五年後の一九五八年には、アメリカ巡回展と「同種同格の大展覧会」〔註29〕として、フランス、イギリス、オランダ、イタリアの四ヶ国を会場として欧州巡回日本古美術展覧会が開催された〔註30〕。矢代はこれら三つの展覧会に、文化財保護委員として関わっている。その後の文化財保護委員会（一九六七年より文化庁）による日本古美術展には、一九六五年の米加巡回展や一九六九年のスイス・西ドイツ巡回展などがある〔註31〕。西川杏太郎氏が指摘するように、次第にこういった「総花的な古美術展覧会」は姿を消し、一九七〇年の禅林美術展や一九八〇年の琳派絵画展のような「ジャンル別、流派・作家別の展覧会に対する要望」が多くなっていた〔註32〕。

以上に見るように、矢代はいくつかの海外展に関わってきた。それは矢代が美術史家として代表的存在であったことを考えれば不思議ではない。にもかかわらず一九五三年のアメリカ巡回展だけが、『遍歴』に詳しく回想されているのはなぜだろうか。

さらに、アメリカ巡回展が一九五三年という年に開催された理由は明らかではない。この年には、講和条約締結のような外交上の行事を見出すことができないからである。「この展覧会は、一八五八年にペリー提督が日本に上陸して百周年と同時に開催された」とアメリカの美術雑誌『アート・ニュース』の年鑑は指摘するが〔註33〕、日本側にそのような意識は見られない。一部には、一九五〇年六月に始まった朝鮮戦争が進行中であることを背景としたものか、古美術品のアメリカへの移動を国宝疎開と言って揶揄する向きもあった

〔註34〕。矢代はサンフランシスコ展の時期について「あまりに早すぎて、なんだか敗戦日本の運命のきまろしい悲しい場合の飾り物をしたよう」だとする一方で、アメリカ巡回展は「戦後適当なる時期に海外における日本古美術大展覧会を開くべしという私の主張」によって実現されたと述べている〔註35〕。それゆえに、アメリカ巡回展は発案者の自発的な意図を持って開催されたと考えられないだろうか。

三、展覧会開催の気運

日本からアメリカへ古美術を運んで展覧会を開催するという計画はいつごろ検討され始め、どのようにアメリカ巡回展として実現されたのだろうか。東京国立博物館が発行する『国立博物館ニュース』は、一九五二年九月一日号で初めてアメリカ巡回展の準備を取り上げ、次のように報じた。

昨年平和条約締結記念にサンフランシスコにおいて日本古美術展が開かれ、好評を博したことは周知のとおりであるが、実は終戦間もないころから日本古美術展覧会を合衆国において大々的に開催することは両国の関係者の間でしばしば話し合われていたところであった。〔註36〕

大規模な展覧会を開こうという話は「戦後間もないころから」出

ていた。サンフランシスコ展は当時の記事に「足元から鳥が飛び立つような準備のあわただしさ」とあるように(註37)、予期せずして開催が決まったものだったが、これとは別に「大々的」な古美術展として温められてきた案がアメリカ巡回展になったと考えられる。

古美術をアメリカへ、という噂はすでに一九四六年に聞こえている。ランドン・ウォーナー Langdon Warner は同年四月にマッカーサー司令部民間情報教育局美術記念部の顧問として来日し、日本人記者団と会見した。「日本の古美術がアメリカへ移されるといふ話があるが」という質問に対して、ウォーナーは「さういふ噂は私もしばしば聞いたが出所はいづれも日本側でアメリカ側がさういふ意志もしくは計画を持つてゐるといふ事実は私の知るかぎり絶対でない」と答えた(註38)。アメリカへ「移される」とは、展覧会のために貸し出すのか、或いは売られていくのが判然としないが、ウォーナーは話の出所が日本側であることを強調した。

一方で、アメリカ側にも日本古美術展開催の要望があった。一九五〇年一月の『芸術新潮』創刊号は、「昨秋アメリカの視察から帰国した北大の中谷宇吉郎博士の話では、米国の各都市の美術館で日本の古典美術の展覧会はやりたいのだが送料の経費が出ないといつてこぼしてゐたさうだ」と伝えた(註39)。実際に、文中の「昨秋」にあたる一九四九年十一月に開催されたのがシアトル美術館の日本美術展であるが、日本からの貸出は十三点に止まった。

一九五〇年五月の『茶わん』誌上に、シアトル展への出品者や関係者が出席した座談会が掲載された。すでにその場で、のちの矢代

の主張と同じ意見が話題に上っている。第一は「日本の優秀なものは、似たものが二つもある場合には、かくの如く立派なものがあるといつて海外へ出すのがい、と思う」という、日本美術の輸出を容認する意見である。第二は、一九四九年一月の法隆寺金堂壁画の焼失などを背景に「アメリカに行つてた方が大切にされる」という、海外での美術品の保存に信頼を置く説である。第三に「今度またアメリカで日本美術展をやるために、ワーナーさんに来て頂いて出品物を撰んで貰つてもいい、ですね」という、日本美術の理解者として有名なウォーナーへの支持があった(註40)。

この第一と第二の点を、一九五〇年八月に発足したばかりの文化財保護委員会に所属する矢代は、文化財保護法の許す範囲において日本美術の海外進出を促進する立場から、一九五二年に発表した「海外に於ける日本美術」に述べている(註41)。まず「世界の美術国で、日本の如く殆んど完全に名品を国内に留め得てゐる幸運なる国は、全くない」にも拘わらず、一九三三年に重要美術品等ノ保存ニ関スル法律という「輸出禁止のきびしい法律を作つてしまつた」ので、「このままでは、日本美術の偉さは世界に知れようがない」という現状を憂えた。そして矢代は、文化財保護法による保護から外れるかつての重要美術品がやがて輸出禁止を解除されれば「それだけ輸出の自由の範囲は広がる筈」として輸出を容認し(註42)、「国宝及び重要文化財は国際的文化交流のために外国に出すことは、委員会が必要ありと認めれば出来るのであるから」と海外での日本美術展への意欲を表した。加えて、「明治以来海外に出た日本美術

品」について「それ等の主なものの焼失や破壊等の話を殆んど一度も聞かないこと」を指摘した〔註43〕。こうした日本美術の輸出に積極的な意見は、矢代の発言が最も目立つものであるが〔註44〕、前述の誌上座談会の例もあるように時代の気運とも捉えられる。第三の点について、実際にウォーナーはアメリカ巡回展の打合せのために一九五二年夏に来日した。『遍歴』によれば、派遣委員にウォーナーを加えるべきかどうかをロックフェラー三世から尋ねられた矢代は、「ウォーナーに対しては、日本人は皆大なる親しみと信頼とかつ感謝の念を寄せているのであるから」貴重品を借り出す上にも大いに役立つであろう」としてウォーナーを加えるように要望したという〔註45〕。

四、展覧会の発案者 — 矢代幸雄とロックフェラー三世 —

この展覧会は、ロックフェラー三世の肝いりで開催された。一九五二年九月の文部省の文書をはじめ〔註46〕、多くの資料がそのように伝えている。『報告書』には文化財保護委員会事務局長の森田孝によって「開催に至るまでの経緯」が報告されている。

昭和二十六年九月六日より同年十月五日までの一ヶ月間、米国サンフランシスコ市において、講和条約の締結を記念するため、日本古美術展覧会を開催したのであるが、この展覧会を觀

覧された、現國務長官ダレス氏やロックフェラー三世など、米国の有力者から、この種の展覧会を、是非、米国の東部においても開催したい旨、強く熱望された。

続いて、同年十一月、ロックフェラー三世が来日せられ、再び、日本古美術展覧会を米国の主要都市において開催するよう懇望された。〔註47〕

同様に、矢代は新聞連載の『遍歴』に次のように書いた。

それで一九五三年、敗戦後日本が文化的に立直りつつある最初の平和的ゼスチュアとして、国策的に米国に開催されたる日本古美術大展覧会は、米国側のロックフェラー中心にウォーナーその他最高權威の希望に呼応し、日本側でも政府として文化財保護委員会が責任をもつてその趣旨によって敢行したのであった。〔註48〕

しかし単行本の『遍歴』によれば様相は異なる。「向うから頼まれたからやってやる、という形」は「万事やりやすい」が、「今度日本が自主的な国策として、ぜひ日本古美術大展覧会を堂々と開きたいという場所は、文化的ヒンターランドの広大なる、世界的大都市の、第一流の美術館を選ばなければならず、そういうところはなかなか気位も高いから、容易に向うから頼んでこない」。そこで矢代は、「アメリカでは真先にロックフェラー三世を訪ねて、戦後日本が国

策的に行なうべき前記の日本古美術大展覧会の私案について懇談した。ただし「そもそも戦後初めていわば平和復帰記念の日本古美術海外展覧会のこの構想が、ロックフェラーと私との間に初めて話に出たのはいつか、私はよく記憶していない」とも述べている(註49)。そして日本協会会長となつて一九五二年四月に来日したロックフェラー三世に(註50)、「吉田首相に逢つて、米国において日米両政府の協力によって開く戦後初めての日本古美術大展覧会の重要意義を吉田さんに話し、日本政府が大いに力を入れるよう直接に頼んでくれ、と懇請した」という(註51)。つまり、日本側は展覧会開催の意志を持っていたが、ロックフェラー三世から日本政府へ申し込む形となるように矢代が手配したというのである。しかしこのことは、展覧会から十年後に新聞連載された『遍歴』には書かれず、さらに九年を経た単行本において初めて明かされた。この述懐から、矢代の真意をどのように汲み取るべきだろうか。まずは経緯を追つてみたい。

一九五一年一月、ロックフェラー三世は対日講和条約締結を促進するダレス特使団の文化関係担当として来日し(註52)、帰国前日の二月二十一日に声明を発表した。その内容は(一)日米の人事交流(二)文化センターの設置(三)日本研究のための研究所設置(四)各種美術品の交換(五)書籍その他の資料の交換、の五点である。

このうち(四)については「美術の各部門における展覧会の交換が望ましい。近代美術も古代の美術と同様に重視されるべきである」と述べた(註53)。この声明の半年後に開かれたサンフランシスコ展や

一九五三年のアメリカ巡回展は、この声明に後押しされたものと考えられる。

矢代がロックフェラー三世と親しくなったのは、「ロックフェラー三世が戦後初めて日本を訪れ、現在の東京の国際文化会館をつくつてくれるための準備の時期」だったというから(註54)、おそらくこの頃である。声明(二)の文化センターは、ロックフェラー財団などから寄付を得て、一九五二年八月に財団法人国際文化会館となつた(註55)。

一九五一年九月六日に始まつたサンフランシスコ展は、予定より二日間延長して十月七日まで開かれた(註56)。「朝日新聞」によれば、「サンフランシスコの日本古美術展は非常な好評で、ホノルル、シアトル、ボストンの各博物館からも開催の申込みがあつたという」(註57)。ホノルルからの希望は、今回の出品物を帰途に巡回させたというものだったが、日本側はそれを断つた(註58)。

十月十六日にはロックフェラー三世が再び来日した(註59)。前出の森田孝が述べた十一月の来日とはこれを指すと思われる。文化財保護委員会ではサンフランシスコ展の好評を受けて、要望のあつたイギリス、フランス、イタリア、ニュージーランドの四国と、改めてアメリカのホノルル、ボストン、ワシントン、ニューヨークの四カ所ぐらいで展覧会を開く意気込みであると、十月二十一日の『朝日新聞』が報じた(註60)。報道の時期からみて、ロックフェラー三世の要望が計画を推進したと考えることができる。また、アメリカ巡回展と欧州巡回展の構想が同時に立案されていたことも分かる。

翌十一月、矢代は戦後の欧米美術界の実情調査のためインド経由

でイギリス、フランス、イタリア、オランダ等を巡り、帰途アメリカに寄りハワイ経由で帰国するという半年に及ぶ旅行に出発した〔註61〕。その翌十二月、ロックフェラー三世から高橋誠一郎宛てに

手紙が届いた。内容は「講和会議の期間中サンフランシスコで開かれた日本古美術展が非常に好評だったので、アメリカ国内各都市でも第一級の代表的国宝を集めた『日本美術展』を巡回で開きたい」との希望であった。これに対して文化財保護委員会は一九三九年の

ベルリン展と同じような規模を想定し、ヨーロッパに滞在中の矢代に帰途アメリカに立寄って折衝するよう依頼したという〔註62〕。

矢代は、一九五二年の二月から三月にかけてニューヨークに滞在し、ロックフェラー三世と三回ほど懇談した〔註63〕。『遍歴』による

と、「私がアメリカへ行った時には、近き将来開催予定の日本古美術大展覽会に関する米国側事務的総轄は、米国が国の経営として初めてワシントンに新設した大美術館ナショナル・ギャラリー・オブ・アートのフィンレー館長があたることになっており、私はワシントンへ行って万事フィンレー君と打ち合わせる順序となった」。具体的には「大きい事業輪郭として、（一）開催は五都市以上にならぬこと、（二）五都市の選択は米国側が決定すること、（三）出品の選択決定のため、米国側は数人の委員を日本に派遣し、日本側委員と合議すること、等々の大綱を決定し、再びロックフェラーと打ち合わせて私は帰国したのであった」〔註64〕。この打合せをもとに協定が作られたと推測される。よって、アメリカ巡回展が具体化したのはこ

の時点と言えるだろう。

矢代は四月十日に帰国した〔註65〕。ロックフェラー三世はそれから間もない四月十四日に三たび来日したが〔註66〕、前出のように吉田首相に話をするように矢代から頼まれたのはこの時と思われる。

一九五二年六月六日にフィンレーは、アメリカの国務省に、日本の美術品を米国に送るよう日本政府と博物館へ要請するように依頼した。そして、国務省は六月三十日付で日本側に協定案を提示した

〔註67〕。

まとめると、ロックフェラー三世に矢代から展覧会の私案を相談したとすれば、それは一九五一年一月か十月のロックフェラー来日時である。矢代の訪米前に、ロックフェラー三世から高橋宛に巡回展の希望が伝えられているし、すでにフィンレーが総轄に決まっていたからである。矢代が会場に望む「第一流の美術館」の選択はアメリカ側に委ねられたが、その総轄をフィンレーに任せたのはおそらくロックフェラー三世であろう。また日本政府にとってはアメリカから頼まれた形にするという矢代の狙いは、一月の声明で展覧会の交換を提言し、十月に展覧会開催の要望を出し、さらに翌年四月には吉田首相へ話をするという、ロックフェラー三世による働きかけによって実現している。

五、出品物の選定

この展覧会で最も問題となるのは、なぜ第一級品を数多く集める

〔表2〕 出品物内訳

ボストン日本古美術展覧会／1936年／国宝・重要美術品は27%

	国 宝	重要美術品	指 定 外	模写・模本・模造	計
絵 画	2	23	53	4	82
彫刻・工芸		1	15	2	18
計	2	24	68	6	100

ベルリン日本古美術展覧会／1939年／国宝・重要美術品は73%

	国 宝	重要美術品	指 定 外	計
絵 画	15	57	32	104
彫 刻	13	5		18
楽面及能衣裳	1	1	2	4
計	29	63	34	126

サンフランシスコ日本古美術展覧会／1951年／重要文化財・重要美術品は45%

	重要文化財	重要美術品	御 物	指 定 外	計
絵 画	18	12	2	23	55
彫 刻	11	1		3	15
書 跡	4	1		5	10
工 芸	15	18		61	94
考 古				4	4
計	48	32	2	96	178

アメリカ巡回日本古美術展覧会／1953年／国宝・重要文化財は76%

	国 宝	重要文化財	重要美術品	御 物	指 定 外	計
絵 画	12	51	6	1	7	77
彫 刻		5			6	11
工 芸		1			2	3
計	12	57	6	1	15	91

欧州巡回日本古美術展覧会／1958年／国宝・重要文化財は82%

	国 宝	重要文化財	重要美術品	御物・旧御物	指 定 外	計
絵 画	21	33	3	1	7	65
彫 刻	5	16	2	1	3	36
計	26	49	5	2	10	92

典拠：『ボストン日本古美術展覧会報告書』21～23頁、『伯林日本古美術展覧会記念図録』上巻、LXHLXVII頁、『桑港日本古美術展覧会』28頁、『アメリカ巡回日本古美術展覧会報告書』5頁、『欧州巡回日本古美術品展覧会報告書』14頁。数字は件数。

ことができたかという点である。日本の古美術品は傷みやすく、特に温湿度の管理に注意を要することから、保存を優先するなら出品を避けるべきである。では、「日本人が従来、外国に出して見せることをあまりに惜しがってばかりいた日本古美術の第一級品」は〔註68〕、それまでにどの程度海外へ送り出されていたのだろうか。その目安として国宝、重要文化財、重要美術品の出品物に占める割合を、アメリカ巡回展に前後する他の展覧会と比較してみたい（表2参照）。

一九三六年のボストン展の出品物に占める国宝と重要美術品の件数は二七％である。このときの国宝は一九二九年の国宝保存法、重要美術品は一九三三年の重要美術品等ノ保存ニ関スル法律によって定められており、輸出または移出する場合には大臣の許可が必要だった。国宝と重美の出品数が抑えられていることは、「その時の話を聞くと、重要美術とか国宝は持つて行くときに非常にうるさい。それで重要美術でないもので、重要美術クラスのものを持つて行くというので、ものの選択に非常に苦心した」と伝えられている〔註69〕。一九三九年のベルリン展では、全体の七三％が国宝と重要美術品だった。数字の上ではアメリカ巡回展の国宝・重文七六％と同水準だが、戦前と戦後の指定は異なるので注意を要する。一九五〇年の文化財保護法の施行によって、国宝保存法によって定められていた旧国宝は一律に重要文化財に変更され、同時に重要美術品等ノ保存ニ関スル法律は廃止された。そのとき、旧国宝の美術工芸品は五、八一三件、重要美術品は七、九三八件あったという〔註70〕。翻ってアメリカ巡回展の出品物が選ばれた当時の国宝は二七〇件、重

要文化財は旧国宝を含めても六千件足らずであった。戦前には指定を受けた美術品が多く存在していたと言えるだろう。

一九五一年九月のサンフランシスコ展の出品数は多いが、準備期間が短いだけに、重要文化財と重要美術品の数は四五％に止まる。当時は第一次国宝指定が同年六月に行なわれたばかりで、アメリカ巡回展に重要文化財として出品された《鬼道朝敵図》や《市川米庵像》もまだ重要美術品であった。

一九五八年の欧州巡回展では、国宝・重要文化財は八二％である。アメリカ巡回展という前例を踏まえているだけに準備が行き届いたものと思われる。

こうして見ると、一九五三年のアメリカ巡回展において国宝と重要文化財が七六％含まれているのは、従来よりも高い割合であると言うことが出来る。

内容の面では、アメリカ巡回展の出品物には工芸が少ない。サンフランシスコ展には、金工、刀剣、甲冑、蒔絵、陶器、染織、人形などの工芸が出品された。欧州巡回展の彫刻には、工芸とも言える木造舞楽面や木造能面、さらに考古に分類されるべき土偶や埴輪が含まれている。一方アメリカ巡回展の出品物の特徴としては、彫刻は仏像に絞り込まれており、海外の日本美術愛好家に知られるような工芸を排除している。そして絵画には、展示場に映えるような大画面の襖や屏風などが数多く取り入れられている。

出品物の選定には、アメリカ側の希望が加味された。一九五二年八月上旬、フリーア美術館長アーチボルド・ギブソン・ウェンレー

Archibald Gibson Wenley²、元フォック美術館東洋美術部長のウォーナー、そしてメトロポリタン美術館極東美術部長アラン・プリースト Alan Priest の三人が来日した〔註71〕。八月十二日に国立博物館で開かれた最初の打合せ会には、その三氏と文化財保護委員会の高橋委員長、矢代、細川、内田の各委員、森田事務局長、本間美術工芸課長その他関係課員が出席した。その際ウエンレーから「数において多いことは必要としないで百点ないし百廿五点位でよいが、質においてすぐれていることを必要とする」との説明があり、またプリーストは次のように具体的な作品名を挙げた。

今回の展覧会は専門家を対象としないものであるから是非一般の米国人が図録などで知っている有名な作品、たとえば彫刻では百済観音、絵画では源頼朝像とか鳥獣戯画などを欲しい。同時に米国人の知らないものでも優秀なもののは欲しい。

そして、文化財保護委員会側の求めに応じて、アメリカ側は希望案としてドリームリストを提示した〔註72〕。ウォレン・I・コーエン氏の研究によれば、このリストはシャーマン・リーが作成したものである〔註73〕。有名なものでは、一九三九年のベルリン展に出品されてヒトラーが称賛したという、雪村の《風濤図》が含まれている〔註74〕。一方日本側でもあらかじめ出品目録を検討していたが、そのうちの十五件がドリームリストと一致していた〔註75〕。百件からなるドリームリストと百七十一件からなる日本側目録案は、いずれ

も国宝や重要文化財や重要美術品ばかりを集めているが、国宝の多さではドリームリストが勝る。九月二日に行なわれた最後の日米合同の会議の後、日本側は公式な目録案を作成し、九月五日の文化財専門審議会に海外搬出の可否を諮問した。それから出品者と交渉を始め、修正を加えて十月九、十日の審議会で可決した目録は絵画七十九件、彫刻八件からなる。そのうち二十六件がドリームリストに含まれるものであった〔註76〕。最終的な目録は、日本側目録案を土台にしてドリームリストに含まれる良いものを取り込みながら構成されている。

アメリカ巡回展の出品目録に、矢代の日本美術史観は反映されているだろうか。一九四三年に出版された矢代の「代表的著作」〔註77〕である『日本美術的特質』（初版）には、六十四点の図版が収録されている〔註78〕。アメリカ巡回展にはそのうちの八点が出品された（表1参照）。『特質』は日本美術史全般を扱っており、一九六五年に出版された第二版では二百十点の図版を別冊に収録しているが、初版では図版の数は限られている。そのうちの八点が出品物と一致するということは、この展覧会には矢代が日本美術の代表作と考える作品がかなり含まれていると言えるだろう。

第一級美術品の海外搬出については、月光菩薩の首切り問題を引き合いに出した反対意見があった〔註79〕。海外展に際する関係者の懸念は、第一にそのような掛替えのない古美術品の扱い方や輸送に伴う保存の問題であり、第二に日本美術を世界の人々に分かってもらおうという世界美術史上の価値づけの問題であった〔註80〕。それに

対する矢代の考え方は、『遍歴』には次のように表れている。

即ち日本が新たに平和的文化国家として世界に再出発するに際して行なう、海外に対する最初の日本古美術展覧会においては、従来の安易主義や迎合主義を一擲し、日本美術の本領とするところを、彼らにわかつとわかるまいと、堂々と世界の美術の本場に本格的に出場させよう、そうすれば、日本美術は堂々たる位置を世界の大美術のうちに確立するに相違ない〔註81〕

日本美術の本領を発揮する優品を「わかつとわかるまいと」出せば、いづれ分かつてもらえるというのが矢代の考え方である。特にアメリカ巡回展は、日本が「世界の平和国家群に仲間入りするに際して、いわばその引出物」であった。矢代は一九五三年二月から五月まで政府代表文化使節としてアメリカ巡回展に派遣されたが、ニューヨーク会場の仏画の展示室でメトロポリタンの館長テラーに言わしめた「ヤシロよ、一体これが日本美術なのか」という言葉に、大胆な作品選定の方針の成果が集約されている〔註82〕。

むすび

アメリカ巡回日本古美術展覧会は、文化財保護委員会とその美術工芸課、及びアメリカ側の参加美術館といった組織によって運営された。矢代が「ほとんどすべて私の企画でやった」として力を発揮

したのは、計画の立案から具体化の段階においてロックフェラー三世と共同歩調をとった地均しである。そういった交渉には、英米派と呼ばれた矢代の人脈の広さが活かされたに違いない。しかし、矢代が展覧会を立案したことを裏付けるのは自著『遍歴』に限られ、『報告書』などの公の文書には企画者として矢代の名前は現れていない。ただ『カタログ』にフィンレーが寄せた序文に、高橋誠一郎と並んで矢代の努力が讃えられているのみである。

矢代はしばしば「国策的」という言葉でこの展覧会を位置づけ、美術をもつて戦後の日本を世界に仲間入りさせたいと述べているが、そもそもこの展覧会は外務省や文部省などの政府機関が文化外交のために企画したものではない。その言葉の向うには「日本美術の貴緑を世界の大美術のうちに問うてみる」という大志が垣間見える〔註83〕。折りしも戦後、文化財保護委員という立場を得た美術史家が、以前から温めてきた『世界における日本美術の位置』のようなテーマを実践したものがアメリカ巡回展になったのであって、矢代の理想は日本美術が世界に理解されることにあると、考えたい。

- 註1 矢代幸雄『私の美術遍歴』岩波書店、一九七二年九月、三九一頁。
 註2 加藤哲弘「矢代幸雄と近代日本の文化政策」『芸術／葛藤の現場——近代日本芸術思想のコンテクスト——』(シリーズ・近代日本の知第四巻) 見洋書房、二〇〇二年三月、七一頁。
 註3 「アメリカ巡回日本古美術展覧会報告書 昭和二十八年一月—十二月」文化財保護委員会、一九五四年十二月。
 註4 *Exhibition of Japanese painting and sculpture, sponsored by the Government of Japan, Washington: H. K. Press, 1953.*
 註5 国立公文書館所蔵『簿冊標題』条約、協約、協定・昭和二四—昭和二八)「公開」[移管省庁]文部省[作成部局]大臣官房総務課「件名」米国内における日本古典美術展覧会開催方に関する件「件番号」二二「作成年月日」昭和二十七年。
 註6 「報告書」七四頁。
 註7 前者はシアトル会場、後者はシカゴ会場とボストン会場のもの。「報告書」三三頁、三八頁、四二頁。
 註8 「報告書」六頁。
 註9 「文化財保護の歩み」文化財保護委員会編、大蔵省印刷局、一九六〇年十一月、一〇八頁、一一五頁。
 註10 同前、三五三—三七四頁、四七一頁。
 註11 「報告書」八—九頁。
 註12 「協定」第一条第一項、第十六条第一項「報告書」七四頁、七七頁。八面の障壁画や二幅対の掛軸を分けて数えると、九十一件は百十八点となる。但し、ここでは二双の屏風は一点として数えられている。
 註14 「報告書」五頁、七九—八二頁。
 註15 前掲註9「文化財保護の歩み」五四六頁、五四八頁。
 註16 文化庁監修『国宝・重要文化財大全』第一—四巻、別巻、図書編集

- 註17 部編、毎日新聞社、一九九七年六月—二〇〇〇年七月。
 註18 「報告書」七頁。「報告書」と『日本美術年鑑 昭和二十九年版』では会期に違いがあるが、ここでは一般公開日を開幕日とした。
 註19 「協定」第三条第二項「報告書」七五頁。
 註20 「報告書」九—十一頁、十七頁。
 註21 中谷宇吉郎「アメリカでみた日本美術展」『芸術新潮』第六巻第八号、一九五五年八月、一五四頁。
 註22 「アメリカにおける日本古美術展 記念特別展」『国立博物館ニュース』第八二号、一九五四年三月一日、三面。
 註23 佐藤みちこ「一九一〇年日英博覧会について」筑波大学大学院芸術学研究科、一九九七年度修士論文、四六頁。
 註24 「ボストン日本古美術展覧会報告書」国際文化振興会、一九三七年一月、十七—二六頁。
 註25 「古美術関係集報」『日本美術年鑑 昭和十四年版』美術研究所、一九四〇年三月、一六〇頁。「国際文化振興会事業報告 国際文化事業の七ヶ年」国際文化振興会、一九四〇年十二月、二二頁。
 註26 西川杏太郎「海外へ送られた日本古美術展(展覧会の国際交流三十一年)」『月刊文化財』第二二九号、一九八二年十月、四頁。「伯林日本古美術展覧会記念図録」上巻、伯林日本古美術展覧会委員会、一九三九年十二月、XXXIII-XXXVIII頁。
 大宮伍三郎、末吉菊麿、瀬津伊之助、原田治郎、松田福一郎、満山順吉「座談会 シヤトル日本美術展覧会を語る」『茶わん』第二十巻第三号、一九五〇年五月、六七—六九頁。「古美術五点、海を渡るシアトルで開く日本美術展」『朝日新聞』一九四九年九月十九日、二面。フランシス・ハッベル「シアトルの日本美術展」『三彩』第五〇号、一九五一年一月、二四—二七頁。

- 註27 「美術界五年史」『日本美術年鑑 昭和二十一年—二十六年版』美術研究所、一九五二年二月、三五頁。「シヤトル博物館にゆく美術品」国立博物館ニュース 第二九号、一九四九年十月一日、二面。
- 註28 「桑港日本古美術展覧会 昭和二十六年九月六日—十月五日」文化財保護委員会、一九五二年三月、七—二九頁。
- 註29 「遍歴」四〇六頁。
- 註30 「欧州巡回日本古美術品展覧会報告書」文化財保護委員会、一九五九年三月、十六頁。
- 註31 「文化庁が行なった海外における日本古美術展覧一覽」『月刊文化財』第一〇五号、一九七二年六月、二三頁。
- 註32 西川杏太郎、前掲註25、九頁。
- 註33 ART News Annual, No. 23, 1953, p. 23. 引用者記。
- 註34 浅野清、佐和隆研、上野照夫、高田修、小林剛、水野清一、小林太市郎、村田治郎、座談会「古美術に関する最近の諸問題」『仏教芸術』第十七号、一九五二年十二月、七一頁。
- 註35 「遍歴」三七九頁。
- 註36 「日本古美術展覧会 明年一月より約一年間、ニューヨーク・ワシントン・ポスト・シカゴ・シヤトルの五カ所」『国立博物館ニュース』第六四号、一九五二年九月一日、二面。
- 註37 蓮実重康「海外における美術展のあり方（美術思潮）」『国立博物館ニュース』第五五号、一九五一年十二月一日、一面。
- 註38 「日本美術は固有 大和絵と推古佛が大好きだ 奈良京都の恩人ウ氏語る」『朝日新聞』一九四六年四月二十日、二面。
- 註39 「国際交流展覧会実現？」『芸術新潮』第一卷第一号、一九五〇年一月、一八—一九頁。
- 註40 前掲註26「座談会 シヤトル日本美術展覧会を語る」『茶わん』第二十卷第三号、一九五〇年五月、六八頁、松田福一郎の発言、末吉菊麿の発言、六九頁、藤山順吉の発言。
- 註41 矢代幸雄「海外に於ける日本美術」『世界』第六三号、一九五一年三月、七二—八四頁。
- 註42 重要美術品について「当分の間、なおその効力を有する」と定めた文化財保護法の第百十六条は現在も残り、重要美術品は解除されて

- いない。
- 註43 これらに類する矢代の発言は、以下の二つの記事にも見られる。和辻哲郎、矢代幸雄、井上靖「新しき国宝《対談》」『芸術新潮』第二卷第八号、一九五一年八月、一〇七—一一八頁。矢代幸雄「海外にある日本美術」『芸術新潮』第三卷第七号、一九五二年七月号、四四—四八頁。
- 註44 吉澤忠「美術品の海外輸出（時評）」『歴史学研究』第一六〇号、一九五二年十一月、四一頁。
- 註45 「遍歴」三八八頁。
- 註46 国立公文書館所蔵「簿冊標題」条約、協約、協定（昭和二四—昭和二八）「公開」『移管省庁』文部省「作成部局」大臣官房総務課「件名」米国における日本古美術展覧会開催に関する改定協定案の送付に関する件「件名番号」二一「作成年月日」昭和二十七年、「文部省原議書」用箋の裏面。
- 註47 森田孝「展覧会の一般経過について」『報告書』四頁。
- 註48 矢代幸雄「私の美術遍歴（十）」『朝日新聞』一九六三年五月十一日、十一面。
- 註49 「遍歴」三八〇頁、三八二頁、三八三頁。
- 註50 「ロックフェラー氏来日」『朝日新聞』一九五二年四月十四日、夕刊二面。ロックフェラーは同年三月二十五日に米国日本協会の会長に選ばれた（『朝日新聞』一九五二年三月二十七日、三面）。
- 註51 「遍歴」三九〇—三九一頁。
- 註52 「タレス講和特使着京 主権の完全回復へ 随員の顔ぶれ」『朝日新聞』一九五一年一月二十六日、一面。「昭和二十六年美術界年史」『日本美術年鑑 昭和二十七年版』東京文化財研究所美術部（美術研究所）、一九五三年三月、五頁。
- 註53 「文化交流に五点を強調 ロックフェラー氏声明 文化センター設置」『朝日新聞』一九五一年二月二十二日、二面。
- 註54 「遍歴」三八三頁。
- 註55 「国際文化会館一〇年の歩み 一九五二年四月—一九六二年三月」松本重治編集発行、国際文化会館、一九六三年三月、二頁。加藤幹雄編著「国際文化会館五〇年の歩み 一九五二—二〇〇二」増補改

訂版、国際文化会館、二〇〇三年四月、十一頁、三五一頁。矢代は

一九五二年より七一年まで国際文化会館の評議員を務めた。

註56 「滞米中日記」前掲註28「桑港日本古美術展覧会」三七頁。

註57 「海外に日本古美術熱 米仏伊などで展覧会希望」『朝日新聞』一九五一年十月二十一日、夕刊二面。

「滞米中日記」前掲註28「桑港日本古美術展覧会」三六―三七頁。

註58 「ロックフェラー氏夫妻再び来日」『朝日新聞』一九五一年十月十六日、夕刊二面。

註59 前掲註57「海外に日本古美術熱 米仏伊などで展覧会希望」。

註60 「欧米美術界の実情―矢代幸雄氏の縦横談―」国立博物館ニュース第六二号、一九五二年七月一日、三面。「昭和二十七年美術界年史」日本美術年鑑 昭和二十八年版「東京文化財研究所美術部(美術研究所)、一九五四年二月、十頁。

註61 「米国各地で日本美術展 国宝級集め大規模に ロ三世から便り文化財委も大乗気」『朝日新聞』一九五一年十二月二十八日、夕刊二面。

註62 神奈川近代文学館所蔵矢代幸雄関係資料 No. 35834 「備忘録 欧米出張」一九五一、十一、九―一九五二、四。ここに記されているニューヨーク滞在は、二月二十五日から三月四日までと、三月十日から三月十三日までの二回。二月二十八日に「一時 John D. Rockefeller III に中食ニヨバル」、三月十一日に「三時 Rockefeller ト会見」、三月十二日に「朝 Rockefeller ト会見」とある。

註63 前掲註61「欧米美術界の実情―矢代幸雄氏の縦横談―」、「昭和二十七年美術界年史」。

註64 「ロックフェラー氏来日」『朝日新聞』一九五二年四月十四日、夕刊二面。

註65 国立公文書館所蔵、前掲註46「件名番号」二一、フインレーより高橋誠一郎への手紙、「文部省原議書」用箋の表面。

註66 「遍歴」三七八頁。

註67 松下隆章、近藤市太郎、河北倫明、青山二郎「座談会・古美術の海外流出とその対策」『美術批評』一九五二年八月、十五頁、松下隆章

註68 の発言。

註69 前掲註9「文化財保護の歩み」一三三頁。

註70 石沢正男「アメリカに送る日本古美術展 出品目録決定」『国立博物館ニュース』第六六号、一九五二年十一月一日、三面。

註71 前掲註36「日本古美術展覧会 明年一月より約一年間、ニューヨーク・ワシントン・ボストン・シカゴ・シヤトルの五カ所です」。

註72 ウォレン・I・コーエン「アメリカが見た東アジア美術」川島一穂訳、スカイドア、一九九九年九月、二〇四頁。

註73 安松みゆき「一九三九年開催の「伯林日本古美術展」をめぐる二点の絵画」『別府大学紀要』第四二号、二〇〇〇年十二月、一四五―一四七頁。林進「伯林の雪村 昭和十四年(一九三九)の「伯林日本古美術展覧会」『月刊百科』第三八五号、一九九四年十一月号、十三―十七頁。

註74 わら半紙にガリ刷りの小冊子「A 日本古美術展出品目録案」と「B 日本古美術展アメリカ側希望案」を参照した。神奈川近代文学館所蔵矢代幸雄関係資料 No. 36193。

註75 石沢正男、前掲註71。

註76 「遍歴」三三五頁。

註77 矢代幸雄「日本美術の特質」岩波書店、一九四三年四月。

註78 上野直昭「文化財は保護されてゐるか―薬師寺月光菩薩の問題をめぐって―」『芸術新潮』第三卷第十二号、一九五二年十二月号、五六頁。

註79 嘉門安雄「アメリカにおける日本古美術展」[Museum] 第三三号、一九五三年十二月、二五頁。

註80 「遍歴」三九〇頁。

註81 「遍歴」三七九頁、三九七頁。

註82 「遍歴」三九〇頁。

註83 「遍歴」三九〇頁。

(付記)

本稿は、明治美術学会(二〇〇三年四月二十六日、於東京芸術大学)における口頭発表を加筆修正したものです。資料調査に当たっては、矢代若葉氏のご好意にあずかりました。文化財保護委員会については、西川杏太郎氏にご教示いただきました。また、歌田真介氏、五十殿利治氏、鈴木廣之氏、守屋正彦氏、神奈川近代文学館よりご協力を頂きました。ここに感謝の意を表します。

図版典拠

写真1 『報告書』口絵

写真2 『報告書』十七頁